

タイトル	グローバル化の起源再考		
掲載日	2009年08月09日(日)	掲載紙誌名	日本経済新聞
			掲載面

日本経済新聞 2009年(平成21年)8月9日(日曜日)

**今を
読み解く**

京都産業大学客員教授
川北 稔

グローバル化の起源再考

戦後、経済史研究は「一貫して
国民経済の分析を目的としてきた。しかし、歴史学が、基本的に
現代の状況説明を目的に
あるのだ」とすれば、グローバル
化の時代という以上、経済史も
これに対応しないわけにはいか
ない。じつは、世界を主題と
する歴史学の体系は、すでに前
世紀の最後の半期以来、イマ
ニエル・ウォーラステイン
らによって確立もされてきた。
いまでは、グローバル・ヒスト
リーは、流行語としても、新し
いものでもない。

しかし、ここで使われている
「グローバル化」や「世界」と
いう言葉には、いまでも厳密な
定義は与えられていないことが
多い。グローバル化の歴史とい
っても、モノや人の移動や交流
の拡大を主眼とし、金融・情報
が重要になった近年の特徴を
さしていう場合は、区別する
必要がある。実体経済の側面と
ヴァーチャルな経済のそれであ
る。

●「交流」は大昔から
モノや人の移動や交流の拡大
を「グローバル化」とする立場
では、18世紀のいわゆる大航海
時代や19世紀末、イギリスでは
じまった変化が、グローバル
化の起源と見がちなのである。交
流の拡大は、とらえかたによっ
ては、人の歴史とともに古く、
悠久の過去からの、普遍的な傾
向としていつにならなくなってし
まう。

田淵・滝上水沢、N.T.T出版
・2009年)などは、その典
型である。
主体にグローバル化の起源を構
想する歴史学の大半は、大航海
や工業化を、その起原とみなし

ともある。ナヤン・チャンダ等
「グローバル・ヒストリー」人類
5万年のドラマ」(上・下、友

ては、しかも、この立場に立
つ歴史家の多くが、一般の常識
に反して、グローバル化のビ
ックは第1次世界大戦前であり、
現在の世界はなほ、その水準を
回復してないと感じている。
移民、つまり労働力の国際移動
などを指標とすれば、兩次大戦
期の閉鎖傾向の帰路は、いまも
深いとみているのである。

他方、金融や情報を基礎とし
てグローバル化を定義すれば、
その起原は、17世紀オランダの
研究の到達点を示している。

この立場の典型である本書は、
「経済」(大野正・杉本尚典、
名古屋大学出版会、09年)は、
各古澤大学出版会、09年)は、
名古澤大学出版会、09年)は、

たりに書くことが可能となる。
工業化のイギリスではなく、商
業・金融を主体とした近世オラ
ンダ経済こそが、「経済的成性」
の開始という意味で、「最初の
近代経済」であったと定義した
J・ド・フリース、A・ファン
・デ・ワウチ著「最初の近代
経済」(大野正・杉本尚典、
名古屋大学出版会、09年)は、

ととでも、グローバル化は、
自由主義の原印のもとで進展す
る。このため、実体経済と金融
資本主義のいずれも重視するに
しても、グロー
バル化への関心
は、必然的に自由主義への関心
をも呼び覚ましていく。とて、
金融グローバル化の地域社会に
とつての功罪を問うには、新自
由主義の評価こそが、不可欠と
なる。

かつて、新自由主義はオランダ
やイギリスが推進した自由貿易
主義と19世紀からの巨大企業
の相長に反対する立場を指し
た。それと、近年の「新自由主
義」を差別すること、新自由主
義の自己責任論や福祉国家論
を批判しようとする小野塚知一編
著「自由と公共性」(日本経済
評論社、09年)のような仕事も
出てきた。レッセフェネル(自
由放任主義)の運命の意味の再
考を求めた塩田生著「リズム
・KIN」(中公新書・08年)
などでも、沈黙深淵の経済
史、経済思想史研究に、新たな
現実的問題への関心をもちら
す可能性がある。

もともと、ウォーラーズタイ
ンでも近代世界システム史七
巻巻と流通での世界的優位に加
えて、金融面での圧倒的地位を
含む「経済史」の最初の例は、
オランダと記している。イキ
リスは金融グローバル化の起源
を求めた「シエントルマン資本
主義」論者たちも、17世紀末の
「改革革命」をその期としたか
ら、金融グローバル化の起原を
求め、17世紀にその起原を求
めるのが、ひとつの通説となり
つまっている。

「最初の近代経済」
The First Modern Economy

自由と公共性
大野正・杉本尚典

グローバル化の始まりについて18世紀説や17世紀説が
ある。
イラスト・よしか じゅんいち

基準はモノか金融か

自由主義と不可分